

交換の論理，権力の論理

永田 えり子

本論の目的は第一に、有向な二者関係を媒介する力としての権力；オバートな基準によって他の社会的な力と区別される権力；服従者に対して搾取的にふるまう一方で、社会全体の利益に貢献するような権力、を説明することであり、第二の目的は、ホマンズ、ブラウに代表される社会的交換理論の、こうした権力に対する記述・説明能力を検討することである。その結果、次の三つの結論が得られる：(1)従来の交換理論が記述・説明できるのは対等な社会関係のみであり、本質的に不等価な権力関係を記述することはできない、(2)現在の時点で交換理論の発想を救うことができるとすれば、それは「社会財の生産」という概念を導入することによって初めて可能である、(3)交換に加えて「生産」を導入した「社会的生産理論」によって記述される権力構造は、重層構造となる。

【0】 序論：交換という常識， 権力という常識

近代社会に住むわれわれにとって、《社会的相互作用は、利得動機に基づく交換関係にほかならない》という世界観は馴染み深いものである。

「私は彼に～をした。したがって彼は～をするのが当然である」、

「彼が私に～をしてくれるなら、私は～をしてやろう」。

われわれはこうした思考を当然のように受け入れているし、また、こうした思考に従って行為したりする。それはわれわれが「資本主義の論理に毒されているから」かもしれない。が、こうした思考をわれわれが常識として持っているということは一つの事実である。

このような《交換という常識》を持つ一方、われわれは《権力という常識》を持っている。すなわち、

「抵抗を排除してでも自分の意思を他者に押し付けることを可能にする力」

「何か自分のやりたくないことをやらせる力」

「知らず知らずのうちに自分から多くのものを

取り上げる力」

「社会状態を動かす何か不思議な力」

の存在をわれわれは信じている。

これら二つの《常識》はどのような関係にあるのだろうか。ホマンズやブラウの交換理論が主張するように、後者は前者の（権力は交換の）帰結なのだろうか。あるいは双方は全く相容れないもので、われわれは矛盾する思考をそうとは知らずに共存させているのだろうか。

ここではまず《交換という常識》から出発する。すなわち交換理論を採用し、相互行為＝交換であるような世界に住んでみる。その一方で《権力という常識》から、権力関係の満たすべき一般的性質を抽出する。このとき果して交換理論の世界の住人の間に権力関係を発見できるだろうか。それが発見できたとして、そこで形成される権力構造はどのような形をしているだろうか。

【1】 交換理論の世界

1・1. 社会の記述

ホマンズ、ブラウらの社会的交換理論の発想で

は、世界は次のように記述される：

(1) 社会的相互作用とは、社会財（有形無形のモノ）の交換である。

(2) したがって、個人 j が行為するとは、自己の社会財の保有状態 x_j を交換によって x_j' に変化させることである。ただし $i = 1, m$ を全ての種類の社会財を表すものとする、

$$x_j = (x_j^1, \dots, x_j^i, \dots, x_j^m), \\ x_j' = (x_j^{1'}, \dots, x_j^{i'}, \dots, x_j^{m'}).$$

(3) よって、社会状態はすべての個人（ $= n$ 人）の〈社会財の保有状態の組〉として記述される。すなわち社会状態を X とすると、

$$X = (x_1, \dots, x_j, \dots, x_n)$$

(4) よって社会過程は、 t 時点の社会状態を X^t とあらわすことにすると、次のように記述される

$$X^0 \rightarrow X^1 \rightarrow X^2 \rightarrow X^t \rightarrow X^{t+1} \dots \dots \dots \\ \quad \quad \quad \swarrow \quad \uparrow \quad \swarrow \quad \uparrow \quad \swarrow \quad \uparrow \\ \quad \quad \quad E \quad E \quad E \quad E \quad E \quad E$$

この枠組で交換（ E ）はいわば交換理論の世界における〈運動〉の位置を占めるといえよう。すなわち交換についての法則性がわかれば、社会の〈運動法則〉がわかり、したがって社会状態の予測・説明ができる、というのが交換理論の発想である。

1・2. 個人主義

とくにわれわれが扱うのは、個人主義的な交換理論である。個人主義とは「個人が社会を作る」と考えて、個人に関する属性のみを説明項におき、個人の自由な選択を通じて、社会状態を説明・予測する方法である。一般にこうした個人主義は、経済学・ゲーム理論・社会的選択理論が採用しているような〈合理的選択のメカニズム〉による記述を得る。すなわち個人の選好、個人の選択可能領域を与件とし、効用最大化を通じて社会状態が

決定されるというメカニズムである⁽¹⁾。

純粹に個人主義的な交換理論は〈社会財の初期手持量〉を個人の選択可能領域とし、上のメカニズムをもって社会の運動法則とする。そしてそれ以上社会を動かすメカニズムを考えようとはしない。したがって価値や規範、権力構造といったものが社会に存在し、それらが変化していったとしてもそれは、それら自体に備わっている・それらに固有のメカニズムによって動いているわけではなく、個々人の動きに連動しているだけである。価値や権力はこのように名目的なものとして捉えられる。

こうした意味で、権力は個人の行動から〈創発〉するものである。したがって個人の属性から説明すべき事柄なのである。

1・3. 交換理論の世界

結局、交換理論が描き出す世界は次のような世界である：(1)交換世界の住人にとって「何らかの能力を持つ」ことは、何らかの社会財を持つことである。すなわち交換世界の住人は「承認」や「情報」などの社会財を保有しており、それを利得動機に基づいて他者と交換する。この交換が交換世界における相互作用であり、この交換関係が社会関係である。したがって、この世界に権力関係が存在するとすればそれは、「ある特殊な性質をもつ交換関係」として定義されなくてはならない。(2)交換世界の住民達にとって唯一客観的に通用する価値とは「社会財の価格」のみである。「社会財の価格」は互いの間の交換比率によって決まる（たとえば「おにぎり2個」と「柿の種1個」が交換されたならば、「柿の種1個」の価値は「2おにぎり」）。

すなわちこの世界は社会全域を利得動機（もちろん「愛他的な自己利益」も含めて）と価格の運動法則が覆っているような世界であり、ワルラスの〈交換の一般均衡〉が経済財以外の全ての社会財をも含んで成立する世界である。

【2】 権力の論理

2・2. 権力関係の持つべき性質

— 権力の記述問題

これからわれわれはなんらかの定義によって、交換の世界に権力を記述しなくてはならない。その際に起こる問題は、〈ある記述が権力の記述として適当かどうかを判定する基準は何か〉という〈権力の記述問題〉である。

交換と権力はそれぞれ独自の存在性格を持つ。したがって「交換の世界で権力を記述した」と思っても、それは権力とはいいがたい何か他のものかも知れないのである。

すなわち問題は記述の成否である。概念の定義は論者の恣意に任される仕事であるが、だからといって権力を任意に記述してよいというわけにはいかない。たとえば

「AがBを殴ったならば、そしてそのときのみ、AB関係を権力関係として記述する」という理論がよい権力論だとは誰も考えないであろう。記述に失敗するとは論じる対象の確定に失敗することである。

それでは記述の成否をいかにして判定したらよいだろうか。われわれは〈権力という常識〉に依拠しつつ、〈権力関係の満たすべき性質〉を最初に要請するという方法をとりよう。すなわち通常われわれが権力に求める性質、学説史的に権力の性質として定着している性質を抽出して権力の条件とするのである。もちろんどのような性質をもって条件とするかは論者によって異なるであろうが、ここでは次の性質を要請しよう：

〔二者関係としての権力関係／権力の有向性〕権力－服従関係は、社会的相互作用のある二人の個人の間で定義される、「向きのある」関係である。

すなわち権力現象は個人と個人の二項関係で記述されるべきものとする。この方法によって権力構造は有向グラフによる記述を得ることができる。

(永田〔1986〕)

〔実証可能性〕指定された権力関係は、何らかのオバートな基準によって他の社会関係から区別されなくてはならない。

これらの性質は非常に形式的である。ここまでで反論する読者はほとんどいないであろう。だが、これらによって囲まれる社会関係の範囲はあまりにも大きい。たとえば、先の「殴る・殴られる関係」は、この規準を満たしてしまう。

ここで問題なのは「有向性」の内容である。〈A－殴る→B〉という有向性は我々の直観にそぐわないのである。そこで、権力に関するいくつかの言明を手がかりにして、もうすこし内容的な要素を付け加えてみよう。

たとえば、権力関係は「脅かすことで抵抗を排除しでも」誰かが誰かに何かをさせる関係である、と認識されたり(Blau〔1964=1974〕)、あることをしないと「重大な価値剥奪が期待されるような関係」であったりする(Lasswell〔1948=1953〕)。つまり、〈強制〉、〈脅迫〉や〈搾取〉は権力関係の重要な要素である。

このように、一般に権力はそれが向かう相手(服従者)にとっては非常に搾取的に働く迷惑なものである。だが、その一方で、社会全体にとってみれば権力はよいものだとみる論者も少なくない。たとえば権力は共同目標達成のための資源動員力であったり(Parsons〔1969=1973/1974〕)、集合的利益に貢献するものである(Blau〔1964=1974〕)、と認識される。すなわち、われわれの求める権力とは、対人関係としては搾取的関係を作りながら、他方では社会を秩序だてたり、富ませたりする、そういう力である。

こうしたことを考え合わせて、権力の定義が満たすべき最小限の要請を次のように立てよう：

【要請】権力関係は搾取的な二者関係である。ただし、どの関係が搾取的で、どの関係がそうでな

いかは明確でなくてはならない。

いうまでもなく、何がそうでないかといったことは理論相関的に決まることである。

【3】 交換理論による権力関係の記述

3・1. 交換の論理 権力の論理

以上でわれわれは交換と権力について知ることができた。これから行う作業は「交換の世界で権力を発見することができるかどうかを確認する」作業である。これを行う目的は、一方では「交換という常識」と「権力という常識」の両立可能性を探ることによって、我々のもっている「常識の体系」の形状を一部分だけでも明らかにすることであり、他方では交換理論の権力論としての性能を確認することである。

さて、交換と権力を比較して直ちにいえることは、「交換の世界には強制的関係はない」ということである。なぜなら、交換の世界における相互作用は全て個人の自由意思によって結び結ばれるからである⁽²⁾。したがって、交換の世界では「強制」を基準として権力関係を発見することはできない。それではこの世界にどうやって権力を導入すればよいのだろうか。

先に述べたように、交換の世界で流通する価値、それによって交換の世界の住人達が自らの関係を評価するのに用いる価値は「価格」のみである。したがって、「搾取的」な非対称性が彼らにとって有意味であるためには、ある二者関係の一方と他方の間に「価格表示」で相違がなくてはならない。ゆえに、交換理論の世界で先の要請を書き換えると、次のようになる。

【要請】権力関係において、権力者と服従者は自由意思によって関係を結ぶにもかかわらず、権力者は服従者よりもその関係から多く、価格表示の価値を受け取るのではなくてはならない⁽⁴⁾。

3・2. 狭義の交換理論の不可能性

交換理論一般を(1)交換のみを扱う理論、すなわち狭義の交換理論(以下、SETと略記)と、(2)社会的交換に加え、社会財の生産を扱う理論(以下、SPTと略記)とに分類しよう。

従来「交換理論」と呼ばれてきたホマンズ、ブラウなどの議論は、ここでいうSETに属する。SETの描く世界では、人々が交換する社会財は初期手持量として人々に割り振られている。そこには人々が手持ちの財を生産によって交換し、交換に供するという契機がない。さて、このような交換において権力関係を記述する方法には、権力実体説、富＝権力説や、模索過程説、などがあるが⁽³⁾、これらに共通して明らかに次の定理が成り立つ：

【定理】SETは要請を満足するような権力関係の記述を行うことはできない。

(1)交換理論では関係を評価する価値基準は「価格」しかない、(2)さらにSETでは、関係を評価する(価格表示の)価値基準は「その関係で取り引きされている社会財の価値総額」しかない。(3)交換は定義上常に等価交換である(ある財と他の財が交換されたことをもって、それらが「等価であった」とみなし、それらを等価とみなすことによってはじめて各財の「価格」が決まるのであるから)。つまり、交換関係ABにおいてAがBに提供する価値総額と、BがAに提供する価値総額とは常に等しい。以上の理由により、SETの世界に住む人々にとって、ある関係が他の関係よりも「搾取的」であり、したがって権力的である、と考える根拠はないのである。例えば次のような例を考えてみよう。AがBを「服従しないと昇進させないぞ」と脅して、服従を100単位調達しているようなケースである。これは「われわれの世界」からみれば、非常に権力的に見える。だが、SETの世界からみれば、これはたんに、「服従」100単位と「昇進」1単位との等価交換である。Bが「昇進」を欲しがっていると同程度にAは「服従」を欲しがっている

のであるし、Bが昇進しないことを恐れているのと同程度にAは「服従」が手に入らないことを恐れているのである。ここにBがAに比べて不利であるとする理由はない⁽⁴⁾。

言葉を換えれば、SETは非対称的な・搾取的な関係として社会的相互作用を記述する枠組を持たないのである。つまり、SETは権力関係を記述することはできない。SETの世界には、「権力」は存在し得ないのである。さらにいうならば、SETでは個人の富の総量、社会における富の総量はともに一定である。ここには誰かが権力関係を通じてとりわけ社会に貢献する契機はない。それではSPTを導入したらどうだろうか。つまり社会的生産のある世界に権力はあるだろうか。

3・3. 社会的生産のある世界

社会的生産を次のように定義しよう：

【定義：社会的生産】個人は交換によってのみでなく、自らの手で社会財を交換することによって、社会財を獲得することができる。このように変換によって社会財を獲得することを、社会的生産という。

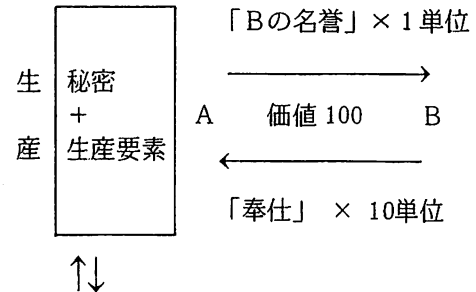
このような「生産」の概念を含むように拡張された交換理論は、次のように行為や相互作用を記述する：

(例1) 他者に助言を提供するという行為は、「知識」という生産設備を用いて「助言」という財を生産し、他の財(例えば承認)と引き換えに、他者に提供することである、と記述する。

(例2) ゆすり、ゆすられる関係は、一方が「情報」あるいは「ゆすりのネタ」という生産設備を用いて相手の「名誉」という財を生産し、相手に高価に購入させる関係である、と記述する。

例えばAがBの名誉にかかわる秘密を握っており、それをネタにBから「奉仕」という社会財10単位を齎し取っている状況は次のように記述できる。

A：生産者。秘密：生産設備。Bの名誉：生産物。 B：「Bの名誉」の消費者。奉仕：1単位の価値=10の社会財。



生産費=価値2の「労働」+価値1の「交通費」

従来のSETでは、情報や愛情のように他者に提供しても消滅しない財を記述できない、という難点があった。しかし生産を導入すれば、そのような財を「社会的生産物」として無理なく記述できる、という利点がある。

そしてもう一つの利点は、生産の導入によってSPTが「社会的利潤」という概念を手に入れることである。まず定義しよう。

【定義：社会的利潤】ある生産者が社会財p, qを交換して社会財rを生産したとしよう。このとき、交換に供したrの総価値額から、それらを生産するのにかかった費用、すなわちp, qの総価値額を差し引いた額が、社会的利潤である。

つまり、社会的利潤は通常いところの「利潤」と同様に考えればよい。そしてこの概念が示唆しているのは次のことである。第一に、社会的な富が増加する契機があるということ。第二に、ある関係が、そこに投入されているコストとそこで取り引きされている価値額という二つの価値基準によって評価されるということ。これらはともにSETでは存在しなかった可能性である。

例えば、次のように権力関係を記述することができる。

【定義：権力関係】ある交換関係において、一方

がその関係から得る社会的利潤が他方の得るそれよりも大きいとき、権力がそのような利潤の差を生んだものと見なしてその交換関係を権力関係と呼ぶ。

例えば先の例では、Aは「労働」と「交通費」（以上で価値3）を変換して「名誉」（価値100）を作った。よって、Aの利潤=97。Bの持っている「奉仕」はもともと価値100であるので、Bの利潤=0。よって、A B関係は権力関係である。

この定義はSPTによる権力定義のほんの一例であるが、第一に「ゆすりのネタ」や「知識」という効率の良い生産設備（利潤を生み易い生産設備）こそが権力基盤である、と考えることができる点で従来のブラウやホマンズの権力論との接続もよく、また、彼らの意図のより明解な表現となっている。第二に、大きな利潤を得たということ、それだけ社会的な富の増加に貢献しているということである。すなわち「社会的利益に貢献する権力」の記述に成功している。そして第三に、この定義は先の要請を満たす。すなわちここでは、等価交換でありながら（権力が働いて）二人の個人の間の実質的な差異が生じる、そういう関係を記述できているのである。

【4】 権力の重層構造

4・1. 社会的生産設備

前節で述べたように、SPTにおいて権力の基盤は効率の良い生産設備である。たまたま事前にこのような生産設備を保有していた個人は、彼が生産する社会財を需要する人々と交換することによって、少ない労力で多くを手にいれることができる。

もしもすべての生産設備が個人にとってgivenであると仮定するならば、権力構造の重層性を考える必要はない。が、もしもある種の生産設備が交換によって譲渡可能であるとすればどうである

うか。いうまでもなく、今度は権力基盤たる生産設備が人々によって需要されるであろう。すなわち、社会財における〈資本市場〉が成立するのである。

この〈資本市場〉においても再び権力関係が成立する。すなわち、今度は権力基盤たる生産設備を生産する効率の良い設備を保有しているものが権力者となるのである。たとえば「知識」や「学歴」を与えることのできる大学や、人事権を有し、他者に「地位」を与えることのできる個人などがこれにあたる。

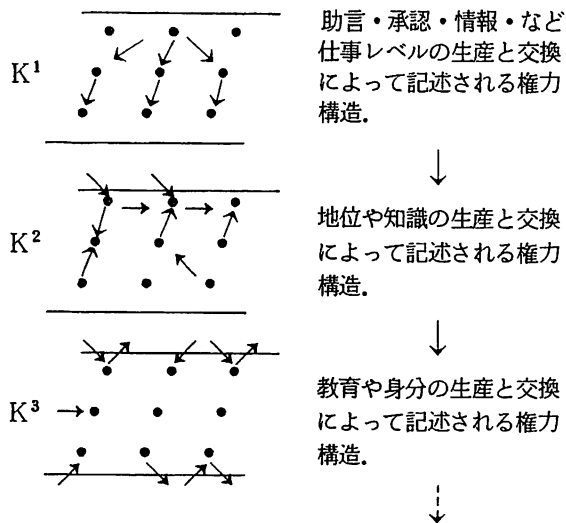
4・2. 重層構造

さて、以上を考慮にいったとき、SPTによる権力の記述は次のように行われる：

- (1) 社会財を、直接消費される財（消費財）、生産設備、生産設備によって変換される財（生産要素）に分類する。
- (2) 社会的相互作用を観察し、各消費財や生産要素の交換比率を算出することによって、誰が、何を基盤として、誰との交換によって、どれだけの社会的利潤を得たかを調べる。
- (3) 以上の情報と定義をもとに権力関係を抽出する。抽出した権力関係をもとに、社会の権力構造を記述する。この段階で記述された権力構造を〈1次の権力構造〉と呼ぶ。
- (4) 次に、生産設備に着目する。生産設備の生産と交換によって、誰が、何を基盤として、誰との交換によって権力者となっているかを調べ、上と同じ手順で〈2次の権力構造〉を記述する。

以上の手順は、われわれがそれ以上さかのぼることができない〈本源的生産要素〉すなわち社会の最終的な権力基盤につきあたるまで繰り返される。この繰り返しによってわれわれは、n次の権力構造までさかのぼることになるのである。

例 — ある企業における権力構造



このように、SPTは現実の社会の動きを観察し、それを自らの記述枠組で解釈することによって権力の重層構造を描き出すことができる、ということがわかった⁽⁵⁾。すなわち、〈交換と生産のある社会〉には、権力を書き込むことができるのである。

4・3. 生産という常識

われわれは〈交換という常識〉、〈権力という常識〉から出発して、両者が両立するかどうかを調べた。そしてその結果、〈生産という常識〉、すなわち

「われわれは何かを糧にして、絶えず新しい何かを作り出している」

「何かを作り出す能力は、人によって異なる」

「能力は生得的なものもあり、また、後天的に獲得されたものもある」
などの思考を媒介することによって可能となる、ということを見たのである。

【5】 残る問題 — 経済学と社会的交換／ 社会的生産

さて、SPTの記述能力は明らかになった。すなわち、SPTの目で社会を見れば、権力構造を発見できるということが分かった。

が、SPTの説明能力はどうだろうか。はたして個人の選好や初期手持量、生産関数などの初期条件についての情報から、権力構造を予測したり、変化の方向を示したりすることができるだろうか。

われわれはここまで経済学の枠組を活用してきた。それというのも社会的交換理論がそもそも経済学の応用という形で始まったからである。しかし、さらに進んで権力構造を説明しようとするとき、もはや経済学に依存することは難しい。権力の有向性が説明できないからである。

経済学(とくに理論経済学)は、初期配分が与えられたときに、果して均衡が成立するかどうか、また初期条件の若干の変化が均衡にどのような変化を及ぼすか、といったことに主に関心を寄せる。そしてその場合、われわれにとって必要な二者関係にはあまり関心を払わない(かまたはわれわれのような関心は持たない)。彼らにとって財は全体で帳尻が合えばよいのであって、誰が、誰から買うか、といったことは問題にならないのである。(第一転売の自由があり、また支払い手段たる貨幣がある以上、事実上これを予測することは不可能だし、意味がない。)したがってこのままでは〈権力の有向性〉を説明できない。

以上の理由により、われわれは全く新しいモデルの必要に迫られているのである。

【註】

(1) このようなメカニズムは、自由主義の理論的な反映といえよう。すなわち個人はどんな選好を持ってもよいという「内面の自由」と、与えられた権利の範囲内では行動を制約されないという「外面の自由」をもっていることが前提となっている。つまり、本論は「自由な交換」と「権力」の両立可能性を問題にしているのである。

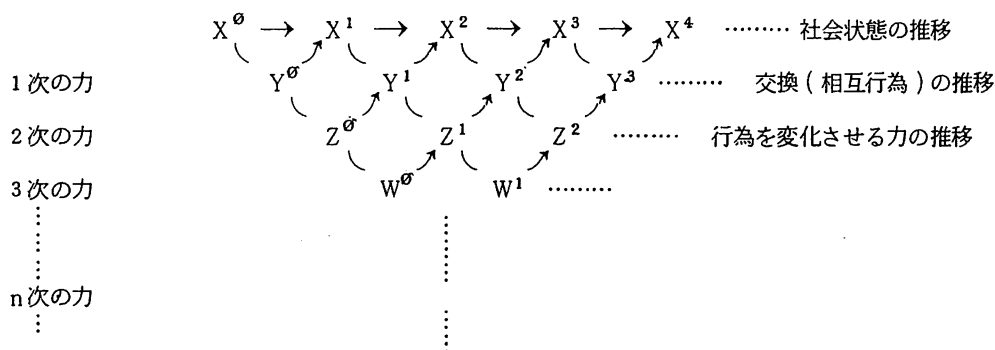
(2) 志田〔1987〕の定理を参照のこと。

(3) 永田〔1986〕に解説がある。

(4) ここで注記すべきは、われわれの世界には存在する(とされる)文化的諸価値や役割などの評価基準が交換の世界には存在しない、ということである。よって、たとえば「服従することは人間の尊厳にかかわることであり、昇進を保証することはそうでない」といった価値基準や、「Aは実力者だがBはそうではない」といった価値基準をアド・ホックにたてることには意味がない。なぜならこれらの価値は、〈価格〉と違って共有されていない、いわば私的幻想や錯覚である。権力を錯覚として定義してしまうのは時期尚早である。

(5) 権力(Power)とは、読んで字のごとく何らかの“力”である。そして力である以上、何かの変化にかかわる概念であることは確かである。そして、どのレベルの変化にかかわる概念であるかによって、ここでもまた重層性に出会う。第一に権力は、社会

状態を直接変化させる力、即ち〈1次の力〉かもしれない。(ところで、社会状態を直接変化させる力は〈行為〉である。したがって、この場合権力は、行為の特殊な形態として捉えられよう。)第二に権力は、行為の組を変化させる力、即ち〈2次の力〉かもしれない。この場合権力は、人々の行為を変化させる力である。すなわち何か動学的な力、あるいは初期条件の変化の中に権力は書き込まれることになる。第三に権力は、社会状態を変化させる力である人々の行為を変化させる力を変化させる力である、と定義してもよい。即ち〈3次の力〉かもしれない。同様にして4次、5次……n次の権力をわれわれは考えることができる。ただし、ここでいう重層性と本論で述べた重層性との関係は必ずしも明確ではない。



<参考文献>

- Blau, P. M. 1964 *Exchange and Power in Social Life*. Wiley. ブラウ 1974 『交換と権力』間場・居安・塩原(訳)新曜社
- Coleman, J. S. 1972 "Systems of Social Exchange" *Journal of Mathematical Sociology*, No. 6.: 145-163.
- Debreu, G. 1959 *Theory of Value*. Vale University Press. ドブリュー 『価値の理論』丸山(訳). 東洋経済新報社
- Homans, G. C. 1974 *Social Behavior*. Harcourt Brace Jovanovich. ホマンズ 1978 『社会行動』橋本(訳). 誠信書房
- Lasswell, H. D. 1948 *Power and Personality*. Norton and Company. =ラスウェル 『権力と人間』永井訳, 東京創元社

- Lukes, S. 1974 *Power: A Radical View*. Macmillan.
- 永田えり子 1986 「交換と権力のヒエラルキー」『ソシオロギス』No. 10: 196-208.
- 大沢真幸 1986 「交換に伴う権力/交換を支える権力」『ソシオロギス』No. 11.
- Parsons. T. 1969 *Politics and Social Structure*. The Free Press. = 1973/1974
パーソンズ『政治と社会構造』, 新明監訳, 誠信書房
- 志田基与師 1987 「個人主義的権力理論の可能性」『ソシオロギス』No. 11.
- 竹川郁雄 1986 「権力の理論」第59回 日本社会学会報告

(ながた えりこ)